

【一】 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(1)～(9)は段落番号を示す)

問題文は著作権の関係で掲載しません。

問一、文中の傍線――①～⑤について、カタカナを漢字に、漢字を平かなに改めよ。

問二、文中の **I** ～ **III** に入る最も適切な言葉を、次のア～オの中からそれぞれ選び記号で答えよ。

ア あるいは      イ しかも      ウ ただし      エ といえ      オ すると

問三、文中の傍線――1の理由を、文中の言葉を用いて三十五字以内で説明せよ。

問四、文中の傍線――2は、室町時代に能を大成した世阿弥が、能楽論書『花鏡』で述べた言葉である。次の文の(A)～(D)に入る最も適した言葉を本文中より二字で探し、文を完成させよ。

「離見の見」とは、役者が自らの(A)を離れ、(B)の立場の目線を持ち、あらゆる方向から自身の(C)を見る(D)のことをいう。

問五、文中の傍線――3について、筆者の言う「演劇的身体」について十五字以内で抜き出し答えよ。

問六、文中の傍線――4にある「張り」を、文中のほかの言葉で言い換えよ。

問七、本文の内容と一致しない文を、次のア～オよりすべて選び、記号で答えよ。

ア 演劇は、相手に向かう身体の構えを稽古によって学ぶことができるので、コミュニケーション力  
ケーション力を養うための最高の技術である。

イ 人は、仕事モードとプライベートモードの切り替えができない限り、しなやかなコミュニケーション  
ミユニケーションをすることはできない。

ウ コミュニケーション力の向上を望むなら、気を外に放ち、周りを活性化させ、エネルギー  
ルギーの交流を図ることが大切である。

エ いつも身体がエネルギーに充ちていなければ、他者の視線に負けて、本当の自分  
いることはできない。

オ 子どもの頃に自分の全部をぶつける稽古を習慣づけることで、能の本番の舞台でも  
力一杯の状態で演ずることが当たり前になる。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えよ。(1)～(17)は段落番号を示す)

問題文は著作権の関係で掲載しません

問一、文中の傍線――①～⑤のカタカナを漢字に改めよ。

問二、文中のⅠⅡⅢに入る最も適切な言葉を、次のア～オの中からそれぞれ選び記号で答えよ。

ア ところで    イ しかし    ウ あるいは    エ そして    オ たとえば

問三、文中のAに入る最も適切な言葉を、次のア～オの中から選び記号で答えよ。

ア 協動的    イ 経済的    ウ 概念的    エ 排他的    オ 融和的

問四、文中の傍線――1の例として挙げている言葉をすべて抜き出せ。

問五、文中の傍線――2とはどのような言葉のことを言うのか。文中から三十一字で抜き出し

最初と最後の三字で答えよ。

問六、文中の傍線――3「おなじ思い」を説明している言葉を文中から抜き出せ。

問七、文中の傍線――4と同じことを説明している語句を、7段落から十五字で抜き出せ。

問八、文中の傍線――5「もちあう」の意味を、国境・概念の言葉を用いて十五字以内で、「と  
いうこと」に続くように説明せよ。

問九、宮沢賢治の作品を次のア～オの中からすべて選び、記号で答えよ。

ア セロひきのゴ―シユ    イ 銀河鉄道の夜    ウ おらが春    エ 注文の多い料理店

オ からたちの花